

# 監禁されるヒロイン

——ゴシック小説から『ノーサンガー・アベイ』へ——

向 井 秀 忠

## 1.

1818年に『説きふせられて (*Persuasion*)』との合本という形で出版された『ノーサンガー・アベイ (*Northanger Abbey*)』は、ジェイン・オースティンの主要6作品の中で出版が最後となったものの、その執筆時期は最も早いとされている。出版に至るまでの複雑な経緯については、これまでにもしばしば指摘されてきた次のような事情があった。執筆されたのは1798年から1799年頃のこと、これは後に『分別と多感 (*Sense and Sensibility*)』や『高慢と偏見 (*Pride and Prejudice*)』へと書き替えられる草稿が書かれた後の時期に当たる。原稿を買い取った出版社が1803年には広告まで出したものの、オースティンの生前にはついに出版されることがなかった。結局、兄ヘンリーが原稿を売り値と同額で出版社から買い戻しておいたものが彼女の死後になってようやく出版される運びとなり、ヘンリーが現在のタイトルを付けて出版することになった<sup>1)</sup>。こうして、出版こそ作者自身の亡くなった後のこととなったが、『ノーサンガー・アベイ』はオースティンの習作期とその後とをつなぐという大きな意味を持つ作品となった。

そんな位置付けにある『ノーサンガー・アベイ』について論じる際の主要な論点については、次の指摘が十分なまとめとなっているであろう。

したがって、この小説がオースティンの若い頃の作風を最もよく留めてい

て、バーレスク調、パロディー調が濃厚なのも当然であろう。また他の小説ではめったに顔を見せない作者オースティンがたびたび“I”という一人称の形で、在来の小説に対する見解や彼女自身の小説に対する抱負を語っており、小説家としてのオースティンの出発点をみることで興味深い<sup>2)</sup>。

この指摘にあるように、最も強調されるのがパロディとしての側面である。この点については、これまでにしばしば取り上げられてきたので今さら詳細に論じる必要もないが、オースティンがこの作品を執筆する際に想定していたのは、その当時に大流行していたゴシック小説に対するパロディを書くことにあった。その中でも、作品の中でヒロインが実際に夢中になって読み耽るラドクリフ夫人の『ユドルフォー城の怪 (*The Mysteries of Udolpho*)』がその代表作となっている。

しかし、『ノーサングー・アベイ』が小説として面白いのは、この作品が単なるゴシック小説のパロディとしてのみ成り立っているからだけではない。作者の批判はゴシック小説そのものというよりも、それ以上にゴシック小説のある種の読者に向けられている。そのことが、この作品に単なるパロディ作品以上の魅力を与えている。つまり、ヒロインが犯す過ちの原因はゴシック小説そのものにあるのではなく、彼女がそれらをどのように読んでいったのかという受け取り手の側の姿勢を問題にしているのだ。だからこそ、ゴシック小説に溺れたヒロインは判断を誤るものの、ヒロインの相手役となる男性は彼女と同じようなゴシック小説のファンだという設定ながら、その人物の判断力が基本的に揺らぐことはない。この同じようにゴシック小説を楽しむ二人の違いが、どのように作品を受け取るのかという読み手の側の姿勢に因っていることは明白であろう。こうして、小説の読み方に言及することで、この作品は、単なるパロディから読者論的な意味合いをもつ作品へとさらに深みを増すことになる。

同時に、作品の中で読み手の側の姿勢の問題について取り上げることは、そ

のまま書き手の側の姿勢についても言及することにつながっていく。当時は女性が小説を読むことは決して勧められる行為ではなかったという時代背景があり、読者の側の問題を論じる中で、作者の意識がそんな小説そのものを擁護する方向に進んでいくのも必然的だろう。しばしば引用される個所であるが、第1巻第5章の終わりで展開される小説擁護論にその辺りの事情を如実に見出すことができる<sup>3)</sup>。

作品の語り手は次のように論を展開させる。まず、当時の小説の置かれた状況について次のように説明する。

Yes, novels ; — for I will not adopt that ungenerous and impolitic custom so common with novel writers, of degrading by their contemptuous censure the very performances, to the number of which they are themselves adding— joining with their greatest enemies in bestowing the harshest epithets on such works, and scarcely ever permitting them to be read by their own heroine, who, if she accidentally take up a novel, is sure to turn over insipid pages with disgust. Alas ! if the heroine of one novel be not patronized by the heroine of another, from which can she expect protection and regard ? I cannot approve of it. Let us leave it to the Reviewers to abuse such effusions of fancy at their leisure, and over every new novel to talk in threadbare strains of the trash with which the press now groans.

続いて、作家同士の連帯を呼びかけてから (“Let us not desert one another ; we are an injured body.”), 具体的な小説擁護論を述べ始める。例えば、『スペクテーター』誌のようなものであれば、それを読んでいた若い女性は “how proudly would she have produced the book, and told its name” という態度を取るかもしれないが、語り手はその中味についてこう批判する。

...the substance of its papers so often consisting in the statement of improbable circumstances, unnatural characters, and topics of conversation, which no longer concern any one living; and their language, too, frequently so coarse as to give no very favourable idea of the age that could endure it.

これに対し、小説の女性の読者の態度は次のようだと描写する。

‘I am no novel reader—I seldom look into novels—Do not imagine that I often read novel.’—Such is the common cant. —And what are you reading, Miss—?’ ‘Oh! it is only a novel!’ replies the young lady; while she lays down her book with affected indifference, or momentary shame.

そして、次のような小説への称賛が続く。

‘It is only Cecilia, Camilla, or Belinda;’ or, in short, only some work in which the greatest powers of the mind are displayed, in which the most thorough knowledge of human nature, the happiest delineation of its varieties, the liveliest effusions of wit and humour are conveyed to the world in the best chosen language.”<sup>4)</sup>

先の指摘にもあったように、オースティンの後年の作品には語り手が“I”という形ではっきりと登場することはほとんどないが、『ノーサンガー・アベイ』ではしばしば物語に介入してくる。この点に、まだ若いオースティンの小説実作者としての意気込みを読み取るのも決して誤った見方ではないであろう。

このようにゴシック小説に対するパロディとして作品を考えるのとは異なる見方もこれまでにあった。その代表的なものとして、次のような政治的な読み方を挙げておきたい。

『ノーサンガー・アベイ』は、習作から五・六年後の一七九八年から一七九九年頃に書かれた。そのためもあって、まだ習作の手法、雰囲気はかなり引きずっており、ゴシック・ロマンスのパロディ・諷刺をそのサブプロットとして持つ。しかし習作の時とは異なり、ジェイン・オースティンは『ノーサンガー・アベイ』を単なるパロディ・諷刺小説に終わらせるつもりは毛頭なかった。この小説における真意・意図は他にあったと思われる。本節では、『ノーサンガー・アベイ』において、ジェイン・オースティンがゴシック・ロマンスというジャンルの持つ豊かな可能性を巧みに利用して、ある種の政治的メッセージを間接的に伝えようとしているのだということを論じてみたい<sup>5)</sup>。

つまり、この作品は「ジェイン・オースティンの六作品の中では最も政治的・社会的言及が多いことで知られて」おり、「この随所に見え隠れする政治的言及はジェイン・オースティンの本書における意図と深い関わりがあると思われる」<sup>6)</sup>、「ジェイン・オースティンの『ノーサンガー・アベイ』における意図は、ゴシック・ロマンスのパロディという仮面の下に一七九〇年代の英国の政治的・社会的状況を忍び込ませ、間接的に彼女の政治的メッセージを伝達することにあった」という指摘である<sup>7)</sup>。そして、その根拠として挙げられるのが、ロンドンでの暴動、ティルニー将軍の時事論文執筆、自発的スパイなどに関する言及である<sup>8)</sup>。

この指摘からわかることは、オースティンの他の作品と同様に、『ノーサンガー・アベイ』という作品も一面的な分析だけでは決して十分に理解することができないということである。本論では、先に挙げてきたものとはさらに異なる視点から『ノーサンガー・アベイ』について考えてみたい。

## 2.

まず、作品の書き出し部分に注目したい。ジェイン・オースティンの小説の

書き出しはどれも面白いが、『ノーサンガー・アベイ』の次のようなものもその例外ではない。“No one who had ever seen Catherine Morland in her infancy, would have supposed her born to be an heroine. Her situation in life, the character of her father and mother, her own person and disposition, were all equally against her.”<sup>8)</sup>

この個所を読むだけで、この作品の目的のひとつに、当時流行していたゴシック小説のスタイルを茶化すことがあるとすぐにわかる。こうして始められた物語は、両親が特記すべき点をもたない平凡な人間であることのみならず、ヒロインであるキャサリン・モーランド自身についても同様なことが語られている。彼女は、いわゆる女の子が好むとされるようなものに興味を引かれず、むしろ屋外で遊び回ることばかりに熱中している。おまけに、恋愛の相手としてふさわしい男性が近隣には見当たらず、小説にありがちな恋愛沙汰を期待することもできなかった。このように、冒頭で強調されるのは、いかにキャサリンには小説のヒロインとなる資格がないかについてであり、そのことに第1章のほとんどが費やされる。ところが、近所に住む地主のアレン氏が療養のためにバースに逗留することになり、夫妻と親しくしていたキャサリンもこれに同行することとなる。これが、彼女の運命を大きく変えるきっかけとなった。語り手が“*But when a young lady is to be a heroine, the perverseness of forty surrounding families cannot prevent her. Something must and will happen to throw a hero in her way.*”<sup>9)</sup>と語る通りのことがまさに起こるのだ。こうしてキャサリンも、その頃、保養地として、そしてそれ以上に社交の場として隆盛を極めていたバースへ出かけることができ、そこで他の小説のヒロインたちと同じく、異性との出会いや恋愛を経験する機会を得るのである。

しかし、バースへの出発を控えたモーランド家の様子が娘を都会へと送り出す一家にふさわしいものでなかっただけでなく、バースへの道中にも劇的なことは何も起こらない。

Under these unpromising auspices, the parting took place, and the journey began. It was performed with suitable quietness and uneventful safety. Neither robbers nor tempest befriended them, nor one lucky overturn to introduce them to the hero. Nothing more alarming occurred than a fear on Mrs. Allen's side, of having once left her clogs behind her at an inn, and that fortunately proved to be groundless.<sup>10)</sup>

バースに到着した後も事態は変わらない。頼りになるはずのアレン夫人は知り合いを見つけることができず、キャサリンの舞踏会デビューは首尾よく終わるというわけにはいかなかった。このように、『ノーサンガー・アベイ』の書き出しの数章は、小説のヒロインであるキャサリンが、いかに「小説のヒロイン」として人物的にも境遇的にも運命的にもふさわしくないのかが強調されることに終始されている。

しかし、キャサリンがずっとヒロインらしくなかったという訳ではない。バースでは、ソープ兄妹やティルニー兄妹との交際を深めたり、勧められたゴシック小説に熱中するなど、それなりに社交界で様々な経験をする。それだけでなく、後に招待されて出かけるティルニー家の屋敷のノーサンガー・アベイでは苦い経験もする。これらを通して彼女も多くのことを学び、これまでのゴシック小説のヒロインとは違うタイプのヒロインとなっていく。このように自分の作品のヒロインを徹底的に反ヒロイン的に描いた作者の意図として、この作品をゴシック小説をはじめとする当時流行していた感傷過多な小説のパロディにしようとしていることがあったのは明白であろう。

それでは、自分の作品の主人公を、生まれながらにヒロインだったのではなく、ヒロインへと成長していくという設定にした作者の意図はどこにあるのだろうか。レイチェル・M・ブラウンステインの次のような指摘がひとつの手掛かりとなるかもしれない。

Mocking the implausible exaggerations and clichés of novelists, Jane Austen simultaneously suggests that these reflect society's expectations of genteel girls. As Catherine becomes a heroine inevitably, by growing up, biology to construct femininity—much as Simone de Beauvoir does in *The Second Sex*, where she memorably declares, 'One is not born, but rather becomes, a woman.'<sup>11)</sup>

近年のジェンダー理論を引いてきて詳細に論じるまでもなく、いわゆる「男性らしさ」「女性らしさ」が生来的に備わっているものではなく、それぞれの共同体によって作り上げられていく人工的なものであるという考え方は今では広く理解されている。幼い頃の彼女の様子を描いた次のような個所を読めば、キャサリンがヒロインとなるために学ぶべきことがまさにこの「女性らしさ」であることがはっきりとわかる。

She had a thin awkward figure, a sallow skin without colour, dark lank hair, and strong features;—so much for her person;—and not less unpropitious for heroism seemed her mind. She was fond of all boys' plays, and greatly preferred cricket not merely to dolls, but to the more heroic enjoyments of infancy, nursing a dormouse, feeding a canary-bird, or watering a rose-bush.<sup>12)</sup>

キャサリンがヒロインらしくなるということは、男の子のような好みから脱却して女の子らしい興味を持つように変化していくことにかかっている。そうであるならば、『ノーサンガー・アベイ』という小説を、共同体の要請する「女性らしさ（“femininity”）」を主人公の少女がいかにして身につけていくのかについての物語として読むことができるであろう。そういう読み方をするならば、ヒロインが「女性らしさ」を学んで身に付けたものが、結末での彼女の結婚を



考える際にも大きな意味を持つてくることになる。

### 3.

『ノーサンガー・アベイ』の前半部分は、アレン夫妻に伴われたキャサリンが、バースの社交界での彼女の兄ジェイムズとソープ兄妹やティルニー兄妹との付き合いを通して、これまでの田舎の生活にはなかったことを経験していく姿を描いている。そのひとつがゴシック小説への傾倒であり、それと並行する形で、「女性らしさ」を身に付けるレッスンの入門編とも言える実兄と親友の恋愛の駆け引きの実例を目の当たりにする。最初に、結婚市場における男女のやり取りを学んでいく彼女の姿を追っていきたい。

幼い頃のキャサリンについては次のような描写もある。彼女は特に記憶力や理解力にすぐれているという訳ではないし、音楽、絵描き、書き方、算数、フランス語のどれかを学ぶのに特に向いているということもなかった。そんな幼い頃の彼女については次のように説明されている。

What a strange, unaccountable character ! —for with all these symptoms of profligacy at ten years old, she had neither a bad heart nor a bad temper ; was seldom stubborn, scarcely ever quarrelsome, and very kind to the little ones, with few interruptions of tyranny ; she was moreover noisy and wild, hated confinement and cleanliness, and loved nothing so well in the world as rolling down the green slope at the back of the house.<sup>13)</sup>

このように、幼い頃の彼女は何の取り柄もないように描かれてはいるものの、語り手がこの段階でキャサリンの人物保証をしている点は極めて重要である。というのは、オースティンの小説において語り手がある登場人物の長所を認めることは、その人物がいわゆるきちんとした人間であること、あるいは、失敗することがあるにしても、きちんとした人間へと成長していく素養のある人物

であることを表しているからだ。キャサリンについては、続けて次のように語られる。

Such was Catherine Morland at ten. At fifteen, appearances were mending ; she began to curl her hair and long for balls ; her complexion improved, her features were softened by plumpness and colour, her eyes gained more animation, and her figure more consequence. Her love of dirt gave away to an inclination for finery, and she grew clean as she grew smart ; she had now the pleasure of sometimes hearing her father and mother remark on her personal improvement. ‘Catherine grows quite a good-looking girl, —she is almost pretty to day,’ were words which caught her ears now and then ; and now welcome were the sounds !<sup>14)</sup>

まず、身だしなみなどについてのキャサリン自身の意識の変化が語られ、次に実際に彼女の外見も小奇麗になり、その結果として、両親という身内ながらも傍目にも彼女が美しくなってきたことを認めるようになったという。しかし、彼女の「女性らしさ」を身に付けるためのレッスンはこれだけでは十分ではない。その理由は、“She had reached the age of seventeen, without having seen one amiable youth who could call forth her sensibility ; without having inspired one real passion, and without having excited even any admiration but what was very moderate and very transient.”<sup>15)</sup> と語られるように、彼女の生まれ育った村には相手役となりそうな若者がいなかったからである。そのため、次なるステップへの準備ができた彼女は、バースの社交界という結婚市場へ入り込むことで大人の男女の実際的なことを学んでいくことになる。

まず、彼女に恋の駆け引きの実例を見せるのが、バース到着後、早々に親しくなったイザベラ・ソープである。常に異性の視線を引くことだけを考えているイザベラを描写する筆の巧みさは見事だといしか言い様がない。例えば、第1

巻第6章では、キャサリンと話している最中でさえも抜かることなく周りに気を配り、少しでも自分の気を引くような男性がいないか注意を払っている様子がうまく描かれている。そして、キャサリンには男性が自分に対して興味を持つことが迷惑だというふりを装いながらも、本心では自分の方も興味津々だというところが面白い。だから、目的の人物が何事もなくその場を去ると、いろいろと口実をつけながらその後を追っていこうとさえする。しかし、うぶなキャサリンはそんなイザベラの本性をまったく見抜くこともできず、すべてを彼女の言葉通りに解釈する。そんなイザベラが心から恋をしている相手というのが偶然にもキャサリンの兄のジェイムズであったことで、イザベラの見せる恋の駆け引きの手管をキャサリンにとってさらに身近なものとして経験させることになる。

ジェイムズへの想いを彼の妹であるキャサリンに宣言してからも、イザベラの心持ちや態度が基本的に改まるわけではない。キャサリンがそれに気づかないだけなのである。しかし、ヘンリーの兄のティルニー大尉が現れたことで状況は一変する。恋愛沙汰についてはまったく無知で無心であったキャサリンでさえも、さすがに兄とイザベラのことを心配するようになる。しかし、それでもなお、自分の親友を疑うようなことはなく、もっぱら恋の火遊び相手を務めるティルニー大尉にばかり非難の矛先を向ける。イザベラがジェイムズと婚約している限りはティルニー大尉に勝ち目はないので、彼が傷つく前にバースを立ち去るように言ってくれないかと頼んできたキャサリンに、ヘンリーは次のように対応する。

... Henry smiled and said, 'I am sure my brother would not wish to do that.'

'Then you will persuade him to go away?'

'Persuasion is not at command; but pardon me, if I cannot even endeavour to persuade him. I have myself told him that Miss Thorpe is engaged. He knows what he is about, and must be his own master.'

‘No, he does not know what he is about,’ cried Catherine; ‘he does not know the pain he is giving my brother. Not that James has ever told me so, but I am sure he is very uncomfortable.’

‘And are you sure it is my brother’s doing?’

‘Yes, very sure.’

‘Is it my brother’s attention to Miss Thorpe, or Miss Thorpe’s admission of them, that gives the pain?’

‘Is not it the same thing?’

‘I think Mr. Morland would acknowledge a difference. No man is offended by another man’s admiration of the woman he loves; it is the woman only who can make it a torment.’<sup>16)</sup>

ここでヘンリーはイザベラの本質的な欠点を指摘するのだが、“A woman in love with one man cannot flirt with another.”<sup>17)</sup>などと信じ込んでいるキャサリンには、彼の遠回しな忠告の真意は伝わらないのである。

こうした心配をバースに残しながら、キャサリンはティルニー一家とともに彼らの邸宅であるノーサンガー・アベイへと出掛けていく。そして、約束したイザベラからの手紙を心待ちにするものの、一向に親友からは音沙汰がない。すると、まず兄からイザベラとの婚約を破棄した旨を伝える手紙が届いたために彼女は狼狽するが、それを追うようにして受け取ったイザベラからの手紙を読むに至って、ようやくこの親友の本性を知るのであった。その手紙はジェイムズとのごたごたはすべて誤解に端を発していると言い訳するのに終始し、こうなってもなお、ジェイムズとの取りなしを彼の妹であるキャサリンに依頼するものであった。

Such a strain of shallow artifice could not impose even upon Catherine. Its inconsistencies, contradictions, and falsehood, struck her from the very first.

She was ashamed of Isabella, and ashamed of having ever loved her. Her professions of attachment were now as disgusting as her excuses were empty, and her demands imprudent.<sup>18)</sup>

この婚約から婚約破棄と進んだ身近な具体例を通して、キャサリンは社交界でしばしば見られる男女の付き合いの偽善性をしっかりと学ぶのである。と同時に、ヘンリーとの付き合いを通して、彼女自身も初めての恋愛感情を経験する。

バースの社交場で紹介されたヘンリー・ティルニーという青年に、キャサリンは初めから好印象を受ける。そして、その日に別れるときには、彼女の方は彼との付き合いを続けていきたいとさえ考えるようになっていた。こうして、彼女自身の恋愛をめぐる経験が始まることになる。これ以後、ヘンリーの妹のティルニー嬢を加えた二人との付き合いから、ソープ兄妹からは得られなかった中味のある交際を得ることができ、ヘンリーへの想いをますます募らせていくのだった。

そんなキャサリンの気持ちは、いくつかの試練を経てさらに強いものとなっていく。まず、アレン夫妻が予定していたバース滞在の終わりの時期が近づいてきたときに、それから、ティルニー家の方がバースを去ってしまうと聞かされたときなどに、彼女は心を平静に保つことができない。結局は、彼女がノーサンガー・アベイに招待されたことで、そんな心配のすべては払拭されるのではあるが。

しかし、彼女にとっての最大の試練は、普通では考えられないひどいやり方で突然にノーサンガー・アベイを理由もわからないまま追放されたことであろう。このことは、ヘンリーとはもう二度と会えないことをも意味していた。ノーサンガー・アベイを去るときの彼女は次のような思いであった。

Anxious as were all her conjectures on this point, it was not, however, the one which she dwelt most. There was a thought yet nearer, a more prevailing,

more impetuous concern. How Henry would think, and feel, and look, when he returned on the morrow to Northanger and heard of her being gone, was a question of force and interest to rise over every other, to be never ceasing, alternately irritating and soothing ; it sometimes suggested the dread of his calm acquiescence, and at others was answered by the sweetest confidence in his regret and resentment.<sup>19)</sup>

こうして、彼女は真摯に異性を想うことを学んでいくが、これこそキャサリンが苦難を通して学んだ大きなもののひとつであったと言えるだろう。

#### 4.

恋愛修行とともにキャサリンの成長を助けるものに、ゴシック小説を耽読するあまりに犯してしまう失敗がある。バースで知り合った軽薄な友人イザベラ・ソープに勧められたラドクリフ夫人の『ユドルフォー城の怪』を読むことに没頭し、“Oh ! I am delighted with the book ! I should like to spend my whole life in reading it.”<sup>20)</sup>とさえ言うほどに熱中してしまう。そして、このことが彼女の大きな過ちにつながっていく。

バースでの滞在は彼女にいくつかの試練を与え、精神的な成長を促すことになる。中でも大きかったのが、第1巻の第11章と第13章において、兄のジェイムズとソープ兄妹に遠出に誘われた際、ティルニー兄妹との約束を反故にするように説得されることがある。これは彼女の道徳心が試される機会となるが、キャサリンはこの試練を無事に切り抜け、ティルニー兄妹からさらなる信頼を勝ち取る。こうしたことの積み重ねの結果、彼らの邸宅であるノーサンガー・アベイに招待されることになる。ティルニー兄妹と親しくしたいと願っていた彼女にとって、これは二人との友情を深める大きなきっかけとなり、そのことを彼女は素直に大喜びするのであった。

“Northanger Abbey! —These were thrilling words, and wound up Catherine’s feelings to the highest point of extasy. Her grateful and gratified heart could hardly restrain its expressions within the language of tolerable calmness. To receive so flattering an invitation! To have her company so warmly solicited! Every thing honourable and soothing, every present enjoyment, and every future hope was contained in it . . .”<sup>21)</sup>

しかし、キャサリンをそんなにも有頂天にさせたのは、二人との友情だけではなかった。ゴシック小説に夢中になっていた彼女にとって、修道院を改築したという屋敷を実際に訪れることはゴシック小説のヒロインの追体験をする他に他ならず、彼女の好奇心を大いに刺激するものであった。“Her passion for ancient edifices was next in degree to her passion for Henry Tilney”<sup>22)</sup> という彼女の期待感は次に引用するようにどんどん高まっていった。

... and castles and abbies made usually the charm of those reveries which his (Henry’s) image did not fill. To see and explore either the ramparts and keep of the one, or the cloisters of the other, had been for many weeks a darling wish, though to be more than the visitor of an hour, had seemed too nearly impossible for desire. And yet, this was to happen. With all the chances against her of house, hall, park, court, and cottage, Northanger turned up an abbey, and she was to be its inhabitant. Its long, damp passages, its narrow cells and ruined chapel, were to be within her daily reach, and she could not entirely subdue the hope of some traditional legends, some awful memorials of an injured and ill-fated nun.<sup>23)</sup>

これから訪問することになっているノーサンガー・アベイにおいて、自分がゴシック小説のヒロインと同じような体験をすることができるのではないかと

いう彼女の期待は、そこへ向かう途中にヘンリーがいたずらに話したゴシック小説風の物語によってさらに助長される。そのときは、聞き手であるキャサリンの熱心さのあまり、ヘンリーが驚いて話を続けることができなくなったほどで、彼女も次のような様子で言い訳する始末である。“Catherine, recollecting herself, grew ashamed of her eagerness, and began earnestly to assure him that her attention had been fixed without the smallest apprehension of really meeting with what he related.”<sup>24)</sup> こんなふうにして、彼女の期待感は否応なく高まっていった。

しかしながら、実際のノーサンガー・アベイは彼女が期待したようなものではなかった。心待ちにしていた“solemn awe to afford a glimpse of its massy walls of grey stone, rising amidst a grove of ancient oaks, with the last beams of the sun playing in beautiful splendor on its high Gothic windows”<sup>25)</sup> といった光景を目にすることもなく、いつの間にか、目的地に到着していたのである。

She knew not that she had any right to be surprised, but there was a something in this mode of approach which she certainly had not expected. To pass between lodges of a modern appearance, to find herself with such ease in the very precincts of the abbey, and driven so rapidly along smooth, level road of fine gravel, without obstacle, alarm or solemnity of any kind, struck her as odd and inconsistent.<sup>26)</sup>

ノーサンガー・アベイがゴシック小説に出てくるような古くて謎めいた屋敷と違っているのは、その外見だけではなかった。キャサリンが通された部屋も予想していたような古めかしいものではなく、近代的で過ごし良さそうであった。

A moment's glance was enough to satisfy Catherine that her apartment was very unlike the one which Henry had endeavoured to alarm her by the description of. —It was by no means unreasonably large, and contained



neither tapestry nor velvet. —The walls were papered, the floor was carpeted ; the windows were neither less furniture, though not of the latest fashion, was handsome and comfortable, and the air of the room altogether far from uncheerful.<sup>27)</sup>

それにもかかわらず、キャサリンの期待感は高まり続ける。そのため、大きく重い収納箱や背の高い旧式な黒い飾り簞笥などを見つけると、そこに何か重大な秘密や謎が隠されているのではないかと期待に心を膨らめます。しかし、そのたびに、単なる日常的なものだけを発見してがっかりするのだった。

しかし、こうした些細な失敗で懲りてしまうキャサリンではなかった。彼女の最も大きな失敗は、屋敷の主人であるティルニー将軍をゴシック小説に出てくる悪漢と同一視し、彼が自分の妻を屋敷のどこかに監禁しているのではないかと疑い、実際にその探索に乗り出してしまうことだとされる。

まず、将軍がなかなか屋敷の中を案内してくれないという不満を募らせながら、そうするには何か隠された秘密があるのではないかと考えるようになったことがその発端となる。その後、将軍が亡き妻の好んだ散歩道を避けるとか、亡き妻の肖像画を自分の部屋や居間ではなくて娘の部屋に飾っている事実などを知る。そして、これらの事実から、彼に対して次第に嫌悪感を覚えるようになっていく。

...Here was another proof. A portrait—very like—of a departed wife, not valued by the husband ! —He must have been dreadfully cruel to her !

Catherine attempted no longer to hide from herself the nature of the feelings which, in spite of all his attentions, he had previously excited ; and what had been terror and dislike before, was now absolute aversion. Yes, aversion ! His cruelty to such a charming woman made him odious to her. She had often read of such characters ; characters, which Mr. Allen had been

used to call unnatural and overdrawn ; but here was proof positive of the contrary.<sup>28)</sup>

そうしたところへ、ティルニー夫人の死があまりに突然のことで娘さえも立ち会うことができなかったという事実を知り、人目を避けるように早朝や深夜という時間帯を選んで将軍が何かをしているという怪しさなどが相まって、彼女の将軍に対する評価は決定的なものとなる。そのときに連想されるのが、キャサリンの愛読書であった『エドルフォー城の怪』でヒロインを監禁し苦しめる悪漢モントーニであった。

Catherine's blood ran cold with the horrid suggestions which naturally sprang from these words. Could it be possible ? — Could Henry's father ? — And yet how many were the examples to justify even the blackest suspicions ! — And, when she saw him in the evening, while she worked with her friend, slowly pacing the drawing-room for an hour together in silent thoughtfulness, with downcast eyes and contracted brow, she felt secure from all possibility of wronging him. It was the air and attitude of a Montoni ! — What could more plainly speak the gloomy workings of a mind not wholly dread to every sense of humanity, in its fearful review of past scenes of guilt ? Unhappy man !<sup>29)</sup>

こうして、キャサリンの中で現実とゴシック小説の世界がしっかりとつながり、彼女の中では同一視されるようになっていく。しかし、将軍の亡き妻の部屋の探索に意を決して出かけるものの、そこで見つけたのは監禁されやつれ果てた女性の姿などではなく、居心地よく小奇麗にされた部屋だけであった。そして、間が悪くヘンリーに姿を見つけられたキャサリンは、すべてが彼女の一方的で勝手な思い込みに基づいた想像に過ぎず、それが事実とはまったく違っ

ていることを彼によって説明され、次のように諭される。

‘If I understand you rightly, you had formed a surmise of such horror as I have hardly words to—Dear Miss Morland, consider the dreadful nature of the suspicions you have entertained. What have you been judging from? Remember that we are English, that we are Christians. Consult your own understanding, your own sense of the probable, your own observation of what is passing around you—Does our education prepare us for such atrocities? Do our laws connive at them? Could they be perpetrated without being known, in a country like this, where social and literary intercourse is on such a footing; where every man is surrounded by a neighbourhood of voluntary spies, and where roads and newspapers lay every thing open? Dearest Miss Morland, what ideas have you been admitting?’<sup>30)</sup>

ヘンリーのこの言葉は、オースティンの作品の中でもしばしば引用される最も有名なもののひとつであり、一読すると、ここで彼が言っていることはもっともだと感じられる。彼のこの台詞は、かつては空想が行き過ぎたキャサリンを戒める理性的な言葉として読まれていたが、現在では、当時の不安定な社会状況を反映したものとして理解するべきだという主張も出てきている。<sup>31)</sup> 後者の考え方に立ち、もしヘンリーがこの言葉を本心から言ったと考えるならば、彼があまりにも呑気で世間知らずだと、従来とは正反対に解釈することさえ可能となる。そうなると、キャサリンがティルニー将軍に対して抱いた疑いが、実は必ずしも的外れなものではなかったと考えることもできないだろうか。

そう考えるならば、キャサリンがティルニー将軍に対して嫌悪感を抱き疑うようになったのは、ゴシック小説を耽読するあまりに現実と小説世界とを混同してしまったからだとする従来からの見方だけでは十分でなくなってしまう。たとえそういう面があったにしても、実は彼女の観察眼と判断力はそれなりに

すぐれており、彼女が本能的にティルニー将軍の本性を正しく見抜いていたとさえ考えられそうだ。これからしばらくは、当時の社会背景から作品を照らし出して見ていくのではなく、作品を読み直すことを通してキャサリンの観察眼と判断力の正しさを見ていきたい。

## 5.

そもそも、キャサリンがティルニー将軍に対して疑いを持ち始めたきっかけは、単なる一方的な思い込みからだけではなかった。確かに、次から次へと彼女が想像力を駆り立てていったことには、ゴシック小説を偏愛していたことが大きく影響していた。しかし、それがすべてだったという訳ではない。

ティルニー将軍については、彼の社会的な役割や地位、そしてその人間性を探る上で、先に触れたような時事論文執筆や果物の温室栽培などが特に注目されてきたが、その他にも見逃してはならない点がいくつかある。彼の家族の中での立ち居振る舞いがそのひとつである。直感的なものではあったが、当初からキャサリンは将軍の様子に何か不可解なものを感じ取っていた。ティルニー家の食事会に初めて招かれたとき、それがティルニー兄妹とさらに親しくなるきっかけになるのではないかとキャサリンは大いに期待していた。

Catherine's expectations of pleasure from her visit in Milsom-street were so very high, that disappointment was inevitable ; and accordingly, though she was most politely perceived by General Tilney, and kindly welcomed by his daughter, though Henry was at home, and no one else of the party, she found, on her return, without spending many hours in the examination of her feelings, that she had gone to her appointment preparing for happiness which it had not afforded. Instead of finding herself improved in acquaintance with so intimate with her as before ; instead of seeing Henry Tilney to greater advantage than ever, in the ease of a family party, he had never said so little, nor been so little

agreeable ; and, in spite of their compliments—it had been a release to get away from him. It puzzled her to account for all this. . . . *He* could not be accountable for his children's want of spirits, or for her want of enjoyment in his company. The former she hoped at last might have been accidental, the latter she could only attribute to her own stupidity.<sup>32)</sup>

場が盛り上がらなかったのは自分のせいかもしれない、世間知らずでもあるキャサリンはそう考えようと努めるが、先の引用の中で、‘*He*’を特にイタリック体で記すことによって、語り手はその責任の在り処はティルニー将軍であることを明白に示している。つまり、いつもは陽気で口数の多いヘンリーでさえも黙らせてしまうほどの影響力をティルニー将軍は持っているのだ。言葉を換えれば、そこにいただけで子供たちから寛いだ感じを奪ってしまう抑圧的な面が、父親である彼にあることが読者にもわかる。

ティルニー将軍のこの側面は、例えば異常なほど神経質に時間を守ることに固執する様子に象徴されるが、その他にも折に触れて見え隠れする。例えば、第1巻第12章には次のような出来事がある。謝罪に訪れたキャサリンはお目当てのティルニー嬢が不在だと告げられるが、その直後に当のティルニー嬢自身が父親と外出する姿を目撃し、自分が嫌われ避けられたのだと彼女はショックを受ける。しかし、実は、自分の外出が妨げられるのを嫌がったティルニー将軍が、娘は不在だと無理にキャサリンに告げさせたというのが事の真相だったと後になってわかる。ティルニー嬢はむしろキャサリンに失礼になると気にしていたが、父親に意見することはできなかったようだ。

また、第2巻第5章では、ノーサンガー・アベイに向かう直前にバースでの最後の朝食を摂った際にも象徴的な出来事が起こる。時間に遅れた長男に苛立った将軍の様子をキャサリンは行き過ぎではないかと感じている。

Her (Catherine's) tranquillity was not improved by the General's impatience

for the appearance of his eldest son, nor by the displeasure he expressed at his laziness when Captain Tilney at last came down. She was quite pained by the severity of his father's reproof, which seemed disproportionate to the offence. . . .<sup>33)</sup>

このことから、キャサリンは次のように想像する。“... General Tilney, though so charming a man, seemed always a check upon his children's spirits, scarcely any thing was said but by himself . . . ”<sup>34)</sup>

これらのキャサリンの観察から、ティルニー将軍は家庭の中でいわば暴君として君臨し、その権力を振りかざし横暴に振る舞っていると察することができる。そして、ここで注目すべきは、子供たちの中でも、その直接的な犠牲となるのが息子たちではなくて娘であるという事実である。長男のティルニー大尉はそんな父親のことを意に介していないだけでなく、軍隊生活のためにほとんど父親と一緒に過ごすこともない。次男のヘンリーもノーサンガー・アベイ近郊の教区の牧師館に住んでおり、いつも父親と一緒にいる訳ではない。こうした兄たちとは対照的に、娘であるティルニー嬢には逃げ場所がない。それに加え、彼女を守ってくれそうな母親もすでに失っているため、そんな父親と常に二人きりで過ごさざるを得ないのである。彼女のそんな生活ぶりについて、ヘンリーは、“His sister, he (Henry) said, was uncomfortably circumstanced—she had no female companion—and, in the frequent absence of her father, was sometimes without any companion at all.”<sup>35)</sup>と説明している。では、なぜティルニー嬢には同性の話し相手さえおらず、自宅で孤独に過ごさなくてはならなかったのだろうか。結末でのティルニー嬢の結婚に際しての“in all her (Miss Tilney's) hours of companionship, utility, and patient endurance”<sup>36)</sup>という言葉がいみじくも語っているように、彼女の時間のほとんどが父親の便宜のためだけに費やされていたことは容易に想像され、そのために娘であるティルニー嬢には自由な時間がほとんど与えられなかったのではないかと考えられる。ティルニー嬢の置かれ

たこの状況は、作品の冒頭で語られるキャサリンのもの (“...and he (Mr. Moralnd) was not in the least addicted to locking up his daughters.”)<sup>37)</sup> とは対照的に映ってくる。冒頭のアレン氏の娘を監禁する趣味のなさについての言及は、単にゴシック小説だけでなく、サミュエル・リチャードソンやヘンリー・フィールディングの作品に登場するヒロインたちの苦難に対するパロディだとするテキストの注釈における指摘の他に、<sup>38)</sup> この二組の父娘を対比することでティルニー嬢の置かれた状況を際立たせる役割も果たしている。このティルニー嬢の置かれた状況は、まさに精神的な監禁状態と呼ぶことさえできないだろうか。

「監禁される女性」というモチーフがゴシック小説の主な特徴のひとつであることは、デイヴィッド・パンターとグレニス・バイロンによって次のように説明されている。彼らは、ゴシック小説を “male Gothic” と “female Gothic” の二つに分類し、それぞれの特徴について次のように説明する。

Underlying many critical attempts to theorize a female Gothic is the idea that male and female Gothic differ primarily in the ways they represent the relationship of the protagonist to the dominant Gothic spaces depicted. Male Gothic tends to represent the male protagonist's attempt to penetrate some encompassing interior; female Gothic more typically represents a female protagonist's attempts to escape from a confining interior.<sup>39)</sup>

そして、“male Gothic” においては “questions of identity” と “the male protagonist's transgression of social taboos” に重きが置かれる一方、“female Gothic” については次のように説明する。

In the female Gothic plot, the transgressive male becomes the primary threat to the female protagonist. Initially, she is usually depicted enjoying an

idyllic and secluded life ; this is followed by a period of imprisonment when she is confined to a great house or castle (q. v.) under the authority of a powerful male figure or his female surrogate. Within this labyrinthine space she is trapped and pursued, and the threat may variously be to her virtue or to her life.<sup>40)</sup>

このパターンを踏襲する作家が増えたため、ヒロインの境遇をめぐる議論は“general identity politics”から“a more specific concern with gender politics”へと変化したことをパンターとバイロンは続けて指摘し、この時期のゴシック小説を読んでいく際のジェンダー論的な見方の必要性を強調している。<sup>41)</sup>

また、ケアリ・J・ウィンターも同じようにゴシック小説を二種類に分類した上で、その特徴についてさらに具体的な指摘を行っている。

Most male Gothic novelists from the 1790 s to the 1860 s lingered over horrible spectacles of sexual violence, gore, and death, locating evil in the “other”—women, Catholic, Jews, and ultimately the devil. In contrast, female Gothic novelists uncovered the terror of the familiar: the routine brutality and injustice of the patriarchal family, conventional religion, and classist social structures.<sup>42)</sup>

これらの指摘を踏まえると、ゴシック小説の特徴のひとつである父権制社会が女性に強要する身体的監禁が、『ノーサンガー・アベイ』においては、まさにその父権制社会を象徴する父親のティルニー将軍が娘のティルニー嬢を不当なまでに束縛していることを通して、女性に対する精神的監禁へと置き換えられていると考えることができる。この点において、『ノーサンガー・アベイ』には、ゴシック小説の主要なモチーフのひとつが形を変えて引き継がれていると言えるだろう。



ティルニー將軍の暴君ぶりは、自分の娘に対してだけでなく、一家の客人として丁重にもてなしていたキャサリンにも向けられる。彼女は、ロンドンから突然に帰宅してきた將軍によって、唐突に屋敷を追い立てられてしまうのだ。しかも、その際に何の説明もなく、たったひとりで公共の馬車を使わせるという、当時の若い女性にとって危険だけでなく屈辱的な方法を使うという念の入れようである。エドワード・W・サイードは、『文化と帝国主義 (*Culture and Imperialism*)』に収められた『マンスフィールド・パーク』論の中で、ティルニー將軍とは様子が違いながらも、やはり父権制社会を象徴する父親であるサー・トマス・バートラムの腹づもりひとつで、自分の意志とは無関係に引き取られ先のマンスフィールド・パークとポーツマスの実家との間を行き来させられるヒロインのことを ‘a kind of transported commodity’<sup>43)</sup> と呼んでいる。ここでのキャサリンも自分の意志などまったく無視され、まさに商品であるかのようにティルニー將軍の気持ちひとつで移動を余儀なくさせられるのである。

こうした指摘を経てもなお、キャサリンがティルニー將軍のことをゴシック小説の悪漢と同一視したことで、彼女が判断を大きく誤ったと非難することができるだろうか。ティルニー嬢のように、当時の女性たち、特に娘にとってもっとも身近な存在でもある父親こそが、その立場の有する権力を行使することによって、まさにゴシック小説の悪漢のように娘を精神的な監禁状態に置いて抑圧していることは十分にあり得たであろう。こうした状況を踏まえれば、キャサリンは正確にティルニー將軍の正体を見抜いていたと言ってもよい。それだけに、ブラウNSTAYNの次のような指摘もより説得力を持ってくる。

We are persuaded to think her (Catherine's) absurd for having horrific 'visions of romance' about the General—but then, on the other hand, they proved to be substantially correct. No wife-murdered, he is evil in a commonplace way —a greedy, scheming, rude social climber; when he discovers that she is not rich at all, he ejects poor Catherine from his house

without ceremony, or explanation, or pocket money, at an uncomfortable early hour of the morning, forcing her to travel home alone in a public conveyance, therefore in some degree of danger. Insensitive, inhospitable, and selfish, obsessed with marrying his children for money, he is a villain of 'common life', not romance.<sup>44)</sup>

キャサリンが直面するのは「ロマンスの悪漢 ("a villain of romance")」ではなく、現実の社会の中で様々な欲にまみれた「日常生活の悪漢 ("a villain of 'common life' ")」なのである。ウィンターは、こうした父権制社会の不当な権力に対抗する姿勢が 'female Gothic' にはあるとして、次のように指摘している。

...female writers of Gothic fiction fear the unchecked power of men and therefore explore possibilities of resistance to the patriarchal order. Female Gothic plots usually center on women trying to escape from decaying family estates and perverse patriarchs — preserve not because they deviate from normative social roles but because they fill their roles so exactly that their behavior calls attention to the injustice embedded in patriarchal ideology.<sup>45)</sup>

ここでのウィンターの指摘は、まさにこの作品の結末の一文に呼応し、その部分に大きな意味を与えるようになる。

Henry and Catherine were married, the bells rang and every body smiled ; and, as this took place within a twelvemonth from the first day of their meeting, it will not appear, after the dreadful delays occasioned by the General's cruelty, that they were essentially hurt by it. To begin perfect happiness at respective ages of twenty-six and eighteen, is to do pretty well ; and professing myself moreover convinced, that the General's unjust

interference, so far from being really injurious to their felicity, was perhaps rather conducive to it, by improving their knowledge of each other, and adding strength to their attachment, I leave it to be settled by whomsoever it may concern, whether the tendency of this work be altogether to recommend parental tyranny, or filial disobedience.<sup>46)</sup>

ティルニー嬢がたまたま貴族の称号と十分な財産を相続することになった青年と結婚したお蔭で、キャサリンとヘンリーは棚ぼた式にティルニー將軍から結婚の許可を得ることができるのであるが、この二人の頑張り、つまり 'filial disobedience' も、まさに父権制社会に対する抵抗のひとつとして読むことができるであろう。

## 6.

それでは、めでたくヘンリーと結婚することができたキャサリンは、「日常生活の悪漢」から逃れることができ、これから幸せになっていくのであろうか。言葉を換えるなら、ヘンリーとの結婚で幕を閉じる『ノーサンガー・アベイ』という物語は、幸せな結末を約束する小説だと考えて良いのであろうか。この点については、次のような気になる指摘をする批評家もいる。

As she pursues the imaginary mystery of the dead Mrs. Tilney, boldly exploring forbidden areas of the Abbey, Catherine takes on an appealing assertiveness. By the time Austen renders her flat, anticlimactic account of Catherine and Henry's marriage — "the bells rang and every body smiled" — this female agency has been stifled by a narrow domesticity. The rooms the General insists on showing Catherine, the kitchen and offices, illustrate his idea of her future role as domestic administrator. In the spatially restricted knowledge that the novel metes out as appropriate to a woman, Austen carries

through Radcliffe's preoccupation with masculine control of power/knowledge. She makes a joke of the self-induced fears with which Catherine turns Northanger Abbey into a Gothic castle: after dragging out the suspense over the contents of a mysterious chest and cabinet for pages in classic Radcliffian style, Austen unveils their contents as not corpses, or even bones, but a laundry list and "a white cotton counterpane, properly folded". The comic anticlimax carries a serious suggestion. Could it be that for women in this culture, domesticity is the horror? <sup>47)</sup>

確かに、第2巻第8章においてティルニー将軍が屋敷を案内した際、キャサリンが一番見たがっていると彼が信じ込み、そして彼自身も彼女に一番見せたかった場所は他でもない台所であったことが作品に記されている。

Catherine could have raved at the hand which had swept away what must have been beyond the value of all the rest, for the purpose of mere domestic economy; . . . if he (the General) has had a vanity, it was in the arrangements of his offices; and as he was convinced, that, to a mind like Miss Morland's, a view of the accommodations and comforts, by which the labours of her inferiors were softened, must always be gratifying, he should make no apology for leading her on. <sup>48)</sup>

ここに来てようやく、キャサリンが作品を通して学ぶものが「女性らしさ」であるとする冒頭での指摘が大きな意味を持ってくる。家庭内の役割を押し付け、そこへ縛り付けるといふ、いわば精神的な監禁状態に彼女を置くためには、本人に「女性らしさ」のあることが最低の必要条件なのである。逆に言えば、彼女が女性的にならない限り、幸せな結婚という結末の付け方もうまくいなくなってしまう。結婚市場の中で勝ち残っていくためには異性から好まれるよ

うな女性でなければならず、幼少期の彼女は異性を惹きつけるようなタイプではなかった。それゆえに、彼女には「女性らしさ」を身に付ける必要があった。なぜなら、キャサリンは従来から社会が女性に強く求めてきた役割という枠組を超越してしまうほどの精神的な成長をする主人公とは考えにくいからである。極言すれば、ティルニー将軍の考えるような理想の女性像へとキャサリンを変えていくことがこの小説の大きなテーマであるとさえすることができそう  
だ。

このことは、次のような議論へとつながってもいく。結婚後の女性が興味を持つべきことは家事を円滑に行うことであると言わんばかりのティルニー将軍のこの態度は、そしてその根本にある考え方は、果たして将軍のようなタイプの人間に特有のものであろうか。キャサリンが結婚したヘンリーが、こうした考え方に縛られていないと断言することはできるだろうか。

確かに、キャサリンに対する自分の父親の仕打ちに真っ向から反発し、将軍に猛反対されながらも怯むことなく彼女との結婚を押し進めたことから、ヘンリーの意志の強さは認めるべきであろう。しかし、ひとつ言えることは、彼の言葉にはどこか女性を見下したようなものが多く、<sup>49)</sup> 妹のティルニー嬢がキャサリンに次のように兄のことを弁護する場面さえある。“We shall get nothing more serious from him now, Miss Morland. He is not in a sober mood. But I do assure you that he must be entirely misunderstood, if he can ever appear to say an unjust thing of any woman at all, or an unkind one of me.”<sup>50)</sup> ヘンリーは確かに才気煥発な人物であるが、彼の言葉のうち、どこまでが冗談で、どこからが本気なのかを読み取るのに難しいところがある。そういう側面を考えるなら、彼の中にも父親のような一面がないとも限らない。

その上、キャサリンの側にも大きな問題がある。彼女には、ヘンリーのことを批判的に見る力がほとんど備わっていない。“It was no effort to Catherine to believe that Henry Tilney could never be wrong. His manner might sometimes surprize, but his meaning must always be just: —and what she did not understand,

she was almost as ready to admire, as what she did.”<sup>51)</sup> そんなキャサリンの傾向は作品の結末に至ってもなお変わらない。そういう状態のところへ、ヘンリーも “... a teachableness of disposition in a young lady is a great blessing ...”<sup>52)</sup> などと言っているのを見れば、彼の態度次第でキャサリンはどのような状態にでも置かれることになるだろうと容易に想像することができる。そういう意味では、結末に至ってもなお、キャサリンがこの点において精神的に成長したと言いつけることは留保せざるを得ないであろう。

以上の点から判断すると、ヘンリーとの結婚を通して彼女が手に入れることができたのは、父権制社会の束縛から逃れて得られる自由などではなく、以前と同じような狭い場所（女性に求められうる家庭内のことを司る場所）に精神的に監禁され続けることである可能性も捨て切れなくない。キャサリン自身、世に出て色々な経験を積んだ上で次のように感じていることが語り手によって告げられる。

... soon were all her thinking powers swallowed up in the reflection of her own change of feelings and spirits since last she had trodden that well-known road. It was not three months ago since, wild with joyful expectation, she had there run backwards and forwards some ten times a-day, with an heart light, gay, and independent; looking forward to pleasures untasted and unalloyed, and free from the apprehension of evil as from the knowledge of it. Three months ago had seen her all this; and now, how altered a being did she return! <sup>53)</sup>

もちろんこれは帰宅直後のひどく落ち込んでいるキャサリンが感じていることなので、このときにヘンリーの自分への気持ちが変わっていた場合にはもっと違った感慨を持っていたに違いない。しかし、人間の精神的な成長が多かれ少なかれ社会への適応を意味するのであれば、周りのことを考えて自分を抑えることも必要になってくる。「心軽く、陽気で、怖いものなしの気分 (“with an

heart light, gay, and independent”）」を失うことは、あらゆる人が成長する際に感じることなのかもしれない。こうした成長に伴う喪失感というものは、たとえヘンリーとの交際が上手く進んでいたとしても感じていたのではないだろうか。

また、先のボールズの指摘はさらに重要な意味を持っている。と言うのは、『ノーサンガー・アベイ』だけでなく、オースティンの主要な作品のすべてがヒロインの結婚で締めくくられているからだ。結末についてこのように考えるなら、ヒロインの幸せな結婚という結末のつけ方に、生きた時代に縛られたオースティンの限界を読み取ることも可能になるからだ。

しかし、キャサリンの将来が必ずしも悲観的なものだけになるという訳ではない。なぜなら、義妹となったティルニー嬢と親しく付き合う機会を得ることができ、その交際を通してさらに成長するために必要なことを彼女が学ぶ可能性も高いからだ。ティルニー嬢は表立って注目されることの少ない登場人物ではあるが、したたかさという点ではかなりのものであると考えられる。そのことは、家族に対して暴君的な権力を行使し、管理者としてあれだけ有能な父親の目を盗んで、恋人との交際をずっと続けていたことからわかる。“Her partiality for this gentleman was not of recent origin; and he had been long withheld only by inferiority of situation from addressing her.”<sup>54)</sup> 将軍に怪しまれることなくティルニー嬢との交際を続けた相手の男性もまた、相当にしたたかな人物に違いない。娘の恋人に貴族の称号も財産もないのなら、ティルニー将軍はこの交際については絶対に反対していたであろうから、若い二人は密会したり密かに手紙のやり取りをしていたのであろう<sup>55)</sup> だとすれば、この二人が行っていたことも ‘filial disobedience’ のひとつであると言える。

これから先、そんな義妹夫婦との付き合いを通して、キャサリンが良い意味での処世術を身に付けていけば、真に幸せになっていく可能性も十分にある。バースからノーサンガー・アベイへと舞台を変えながら「女性らしさ」を学んできた彼女のレッスンは、彼女が結婚をすることで終わったという訳ではなく、これからはまた別のことを学び続けることによって自分の生活をさらに幸

せなものにするために続けられるのである。そういう意味で、彼女の結婚は一部分では精神的な成長へのご褒美となり得るにしても、結婚してからこそが彼女が成長するための本当の意味での出発点となるのである。

(本論は、2004年3月27日に同志社大学において行われた十八世紀英文学研究会例会シンポジウム「ジェンダー論で読むジェイン・オースティン」において発表したものを大幅に加筆・修正したものである。)

#### 註

- 1) Paul Poplawski, *A Jane Austen Encyclopedia* (London: Aldwych Press, 1998) pp. 209-210.
- 2) 直野裕子, 『ジェイン・オースティンの小説—女主人公をめぐる—』(東京: 開文社出版・1987年) p.10.
- 3) テキストには次のものを用いた。Jane Austen, *Northanger Abbey, Lady Susan, The Watsons, Sanditon*, ed. James Kinsley and John Davie, Oxford World's Classics (Oxford: Oxford UP, 2003). 引用はすべて pp. 23-24.以下, NA。
- 4) 小説擁護の箇所は, すべて NA, pp. 23-24 より引用している。
- 5) 鈴木美津子, 『ジェイン・オースティンとその時代』(東京: 成美堂・1995年) p. 51.
- 6) 鈴木, p. 53.
- 7) 鈴木, pp. 55-63. 『ノーサンガー・アベイ』を政治的に読んだものとして, ティルニー將軍の正体については次の二つの論文が興味深い指摘を行っている。Robert Hopkins, "General Tilney and Affairs of State: The Political Gothic of *Northanger Abbey*", *Philological Quarterly*, Vol. 57 (1978) pp. 214-15. B. C. Southam, "General Tilney's Hot-houses: Some Recent Jane Austen's Studies and Texts", *Ariel*, Vol. II, No. 4 (1971) pp. 52-62.
- 8) NA, p. 5.
- 9) NA, p. 8.
- 10) NA, pp. 9-10.
- 11) Rachel M. Brownstein, "*Northanger Abbey, Sense and Sensibility, Pride and Prejudice*", ed., Edward Copeland and Juliet McMaster, *Cambridge Companion to Jane Austen* (Cambridge: Cambridge UP, 1997) p. 36.
- 12) NA, p. 5.
- 13) NA, p. 6.
- 14) NA, p. 6.
- 15) NA, p. 8.



- 16) NA, p. 109.
- 17) NA, p. 109.
- 18) NA, p. 160.
- 19) NA, pp. 170-71.
- 20) NA, p. 25.
- 21) NA, p. 101.
- 22) NA, p. 102.
- 23) NA, p. 102.
- 24) NA, pp. 116-17.
- 25) NA, p. 117.
- 26) NA, p. 117.
- 27) NA, pp. 118-19.
- 28) NA, pp. 132-33.
- 29) NA, p. 137.
- 30) NA, p. 145.
- 31) Claudia L. Johnson, "Explanatory Notes" in NA, p. 371. 他に, 鈴木, pp. 53-69 に詳しい。
- 32) NA, p. 93.
- 33) NA, p. 112.
- 34) NA, p. 113.
- 35) NA, p. 114.
- 36) NA, p. 186.
- 37) NA, p. 5.
- 38) Johnson, "Explanatory Notes" in NA, p. 357.
- 39) David Punter and Glennis Byron, *The Gothic* (Oxford: Blackwell Publishing, 2004) p. 278.
- 40) Punter and Byron, pp. 278-79.
- 41) Punter and Byron, p. 279.
- 42) Kari J. Winter, "Sexual/Textual Politics of Terror: Writing and Rewriting the Gothic Genre in the 1790s", ed., Katherine Anne Ackley, *Misogyny in Literature: An Essay Collection* (New York: Garland Publishing, Inc., 1992) pp. 90-91.
- 43) Edward W. Said, *Culture and Imperialism* (New York: Vintage Books, 1993, rpt. 1994) p. 88. サイドは, ヒロインであるファニー・プライスの兄ウィリアムもこの中に含めているが, サー・トマスの意志は, 男女の性差を問わず, より弱い立場にある者に対して大きな力を持ち得ている。
- 44) Brownstein, p. 40.
- 45) Winter, p. 92.

46) NA, pp. 186-87.

47) Elizabeth A. Bohls, *Women Travel Writers and the Language of Aesthetics, 1716-1818* (Cambridge: Cambridge UP, 1995) p. 211.

48) NA, p. 134.

49) 例えば、自分を弁護してくれる妹の言葉を受けてさえ次のように言っている。“Miss Morland, no one can think more highly of the understanding of women than I do. In my opinion, nature has given them so much, that they never find it necessary to use more than half.” (NA, p. 83) 他にも、女性の手紙の書き方についてのコメントなど、そんな例は枚挙にいとまがない。

50) NA, p. 83.

51) NA, p. 83.

52) NA, p. 127

53) NA, p. 175.

54) NA, pp. 185-86.

55) 小説の結末でティルニー嬢の結婚について説明される中で、キャサリンが見つけた洗濯代の請求書はティルニー嬢の結婚相手のものだと記されており (“...that this was the very gentlemen whose negligent servant left behind him that collection of washing-bills, resulting from a long visit at Northanger...”, NA, p. 186), 若い二人が長い期間に渡ってノーサンガー・アベイの邸内であるティルニー将軍に気づかれることなく関係を深めていったことがわかる。また、ティルニー嬢は、ノーサンガー・アベイを追い出されるキャサリンに無事に自宅に到着したことを知らせる手紙を送るように頼んだ際、父親に見つからないように彼女の侍女宛にするように言ってキャサリンの気分を害させる場面がある (“Direct to me at Longtown’s, and, I must ask it, under cover to Alice”, NA, p. 169)。ティルニー嬢がこの台詞をごく自然に口にしていることから察すると、おそらくはそうやってこの恋人の二人も彼女の父親の目を盗みながらお互いに連絡を取り合っていたのではないだろうかと思われる。

#### (附記)

本稿は、2002年度に交付を受けた松山大学総合研究所特別研究助成による研究成果の一部である。